

# タイトル（論理学はいかに形而上学にモノをいうか（あるいは言わないか））

氏名（遠藤 進平）

所属（ Institute for Logic, Language and Computation,  
University of Amsterdam ）

形而上学と論理学という二つの、関係しあうとはしても異なったディシプリンについて、前者つまり形而上学的探求のために、後者すなわち論理学の知見や営みがどのような貢献を果たしうるのか、という使役もとい協同の可能性を肯定的に論じる。論理学は形而上学に対して、どこまでならモノを言うことができ、どこからは言えなくなるのか。その適用範囲を明らかにする。

形而上学にかぎらず、思弁活動一般を下支えする器官＝機関（オルガノン）として、いわば手段として論理学はながらく採用され、多かれ少なかれ（ときには新たな論点——混乱を？）貢献を果たしてきた。ただし、論理学と一口にいても、三段論法のように唯一の論理体系を想定しやすい時代状況であるならばいざ知らず、古典論理、直観主義論理、様相論理等々、それぞれがそれぞれの有用性を認められる数ある諸体系のうちより「どの論理」を採用して支えるつもりなのか、ということは問われるべきだろう。すくなくとも、論理の多様性がおおむね実効支配をしている現代において、唯一無二の論理学いわば定冠詞つきの **the logic** により形而上学的実在に関する論争が裁定される、という見立てはあまりに楽観的すぎる、とすることはできる。

しかし、論理学の形而上学への寄与を放棄し、無関係と見切るにはあまりに惜しい。というのも、こと観測・検証不可能性が槍玉にあげられ各方面からなじられる形而上学にとって、論理学は「精神から独立した」形而上学的実在の様子をさぐる、いわば探査機となりうる（ほぼ）唯一のこされた道のように思われるからである。科学実践における実験との単なるアナロジーではなく、論理学は形而上学にとって実験と同等の機能を果たしているだ——これが本稿の究極的な主張である。この接続が仮に有効なのだとしたら、それは論理学の文脈非依存性に大いに起因している。たとえば、「競輪（予測専用の）論理」「南半球（のみで通じる）論理」というものをふつう、われわれは勘定にはいれない。

論理学の形而上学への貢献を保障するための補助線として、二人の哲学者の議論を描きたい。ひとつは **M. Dummet** の論理学の体系を採用することはある形而上学観の採用である、という議論である。Dummet 自身は排中律なる非構成的な原理の採用はすなわち実在論の採用であり、前者の棄却から、彼の形而上学的主張：反実在論を導いたのであった（cf. Dummett, Michael. 1991. *The Logical Basis of Metaphysics*. Harvard University Press.）。もうひとつは **T. Sider** のそれである。彼の主張は Dummet とは対照をなす、構造に対する強固な実在論であるが、彼もまた論理学に、世界の基本構造を言い表す特別な言語——彼の用語でいえば「世界を関節で切り分ける言語」としての地位を割り当てていることは注目に値する（Sider, Theodore. 2014. *Writing the Book of the World*. Oxford University Press.）。

大風呂敷ではない堅実な作業としては、上記の Dummet と Sider が共通して採用している論理学を介したメタ形而上学的方法論から、彼ら自身の対象レベルの形而上学的主張というか好みを、引き剥がして上澄みをとることにある。まず Dummet については、彼自身が導いた反実在論という結論、さらには現行の言語活動のメカニズムの解明こそが哲学の課題だとするメタ哲学観についての是非はいったん保留したうえで、論理的議論から形而上学的帰結を引き出すという方針を流用したい。 Sider に関しては、数学、物理学とならんで論理学を「世界の関節を切り分けることのできる＝構造を書き出すことのできる特権的な言語」の案として提示しており、それじたいは魅力的なのだが、かずある体系のうちから古典論理のみに特権的な立場を認める彼の形而上学＝論理的好みは相対化されてしかるべきだろう。

また、本発表と関連して、ポスター発表では、形而上学でモノを言うための論理学体系の試作品として、複数の論理を表現し抱擁できる「空間意味論」なる新しい形式意味論を提出し、いくつかの形式的成果とその（メタ）形而上学含意を展示する。両発表間の依存関係はなく、独立して鑑賞できるが、あわせて来場いただきたい。■